「まねる②」

「まねる」の 2 回目は，論文などの文書の作法についてです。研究を行った場合，学会発表や論文などを通して公表しますが，そこでは必ず（図表を含んだ）文書を作らなければなりません。研究を公表する際の文章には「作法」があります。その作法に気づき，また似たような文書を作成できるようになるために，「まねる」ということが重要になります。

いうまでもないでしょうが，ここでいう「まねる」は，剽窃ではありません。まねるのは，論文全体の構成の仕方，各セクションに書くべき内容，学術的文章にふさわしい用語や言い回し，断定や推測，およびその程度を示す文末表現，などといった部分です。

たとえば小論文の書き方のテクニックに，「出だしに結論をもってくる」といったものがありますが，これは学会発表や論文では使えません。では，論文の出だし，問題・目的部分の最初はどのようなことが書かれているのでしょうか。問題・目的部分の最後や，考察部分の最初はどうでしょう。こういったあたりの記述には一定の特徴があります。それをまねると，論文らしい文書になります。また，「…である」とまでは断定しがたいけれども，かなり強くそういえそうな場合，どのような表現（言葉）を使うのが適当でしょうか。反対に，かなり弱い推測の場合はどうでしょう。こういったあたりの表現のレパートリーも積極的にまねるべきポイントです。

論文などの書き方は，執筆規定（学会誌の表紙裏に記載されています）等に明文化されているルールに従えばよいだけではありません。明文化されていない作法もあります。そういったことは，まねることによって自分のものにしていくしかありません。

とはいうものの，実は学生指導の経験から，この論文構成や文体をまねて書くということはとても難しいことのようだという実感があります。うまくまねができる学生と，できない学生が生じるのです。どこが違うのかといわれると返答に困りますが，研究や論文に関する知識が影響しているように思っています。前回も触れたことですが，論文の書き方に関する書籍などを参照し，研究や論文に関する知識を増やさないとまねがしにくい（適切なまねにならない）ように思います。まねつつ，学びつつ，研究の基礎力を高めてください。

（南山大学　浦上昌則）